

「世界人権宣言」における良知

小島 毅

はじめに

「世界人権宣言」は1948年12月10日に第3回国際連合総会（United Nations General Assembly）にて賛成多数で可決された¹。その第1条は次のとおりである。

すべての人間は、生れながらにして自由であり、かつ、尊厳と権利とについて平等である。人間は、理性と良心とを授けられており、互いに同胞の精神をもって行動しなければならない。

この英語原文は以下のとおり。

All human beings are born free and equal in dignity and rights. They are endowed with reason and conscience and should act towards one another in a spirit of brotherhood.

西洋思想史で古来重要語彙だった reason（理性）と並んで、日本語で「良心」と訳されている conscience という語が入っているわけだが、起草委員会でこの語を挿入する提案を行ったのは中華民国の代表だった。名を張彭春と

いう。日本では中国の演劇や教育についての専門家にしか知られていないだろう。彼は人間が生来具えるものとしてなぜこの語に理性と並ぶ価値があるという提案をしたのか。本稿は後述する研究状況をふまえて、この問題について初歩的な検討を行う。それによって人間の捉え方、それに基づく人権という概念についてあらためて考える途を開いてみたい。²

1 張彭春の生涯と国共内戦

まず張彭春が「世界人権宣言」起草作業に関わったことの背景をなす2つのこと、張彭春の生涯と中国での国共内戦について概観する。

張彭春は1892年4月22日に天津で生まれた。当時の天津は西洋諸国との条約により北京の外港として発展の最中で、英仏両国の租界があった。張の幼時に日清戦争が起これ、その結果1896年には日本租界が設けられるに至る。のちに紫禁城を退去した宣統帝溥儀が暮らし、この町で接触した関東軍幹部の謀略によって満洲国の元首に復辟したこともあった。

16歳も年長の兄張伯苓は教育者で、現在の南開大学につながる学校を創設しており、彭春はその下で天津敬業学堂・保定高等学堂に学んだ。そして1910年、すなわち辛亥革命の前年に渡米してクラーク大学で教育学の課程を専攻する。以後の彼の略歴を年表式で記す。

- 1913年 コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジ (TC) で学ぶ。1924年に Ph.D. を取得
- 1923年 清華学校教務主任
- 1926年 南開学校に奉職
- 1930年 梅蘭芳劇団を率いて米国講演
- 1931年 シカゴ大学などで教える
- 1935年 梅蘭芳劇団を率いてソ連講演
- 1936年 英国に赴きオクスフォードやケンブリッジで中国近代化について講演する。またオールドヴィック劇場などで京劇について講演する

- 1938 年 第一回国民参政会委員天津代表
- 1939 年 対日経済制裁法の制定を求めて米国連邦議会で演説する
- 1940 年 国民政府外交官として駐トルコ公使に赴任
- 1942 年 駐チリ公使に赴任
- 1944 年 コロンビア大学で教える
- 1946 年 国際連合経済社会理事会の中華民国常任代表に就任、人権委員会副委員長に就任。
- 1947 年 6 月 委員会で第 1 条に two-man-mindedness の追加を主張
- 1948 年 12 月 国連総会で世界人権宣言が採択される
- 1949 年 5 月 人権委員会でソ連代表からの攻撃を受ける
- 1950 年 1 月 ソ連から「中華民国は中国を代表して国連に出席する資格無し」と非難される
- 1951 年 2 月 兄張伯苓が天津で病没
- 1952 年 同僚の蔣廷黻と合わずに辞職、米国ニュージャージー州に移住
- 1957 年 7 月 19 日没

彼は 10 年以上に及ぶ米国留学で高等教育を受け、その成果として教育学の博士学位を取得している。抗日戦争が始まると政治の世界に参画し、戦後は国連における中国代表のひとりとして常駐した。世界人権宣言は彼が起草委員会の幹部として携わった案件だった。なお彼は終生「中華民国」の国籍を持ち、中華人民共和国による「解放」後の天津に戻ったことはなく、かといって蒋介石率いる中華民国政府が遷った台湾にも行っていない。

張が世界人権宣言策定に関わっていたことについて、従来はさほど注目されていなかった。ところが近年中国語圏でにわかにこれを対象とする研究が増えている。中でも孫平華の研究書（2017）は 571 ページに及ぶ大作で、張の全生涯を丹念にあとづけ、彼が中国の代表として世界人権宣言作成で主要な役割を果たし、それによって中国文明の価値を世界に知らしめたことを礼賛している。中国で発表された他の研究者たちの諸論考も管見のかぎり同工異曲である。これは 2012 年の習近平政権成立後に際立つ現象で、思うに

「人権（レンチュアン）」という国際政治ゲームの重要なカードについて、欧米諸国だけでなく中国の手元にも最初から備わっていたと主張するための材料を提供している。その点、きわめて政治的な問題でもあるといえよう。本稿の執筆意図および趣旨はここにある。

さて、彼が人権宣言作成に従事していた期間はまさに国共内戦と重なる。これも年表式にまとめておく。不思議なことに、中国・台湾における諸研究は管見のかぎりこのことに触れていない。

1945 年

8 月 30 日 重慶で蒋介石と毛沢東が会談

10 月 10 日 双十協定調印、上党戦役

1946 年

1 月 10 日 米国特使マーシャルの仲介で「国共停戦協定」調印

6 月 22 日 共産党「米国の蒋介石に対する軍事援助に反対する声明」

6 月 26 日 蒋介石が共産党による「解放区」に対する進攻を指令

12 月 18 日 トルーマン大統領が中国内戦からの米国の撤退を表明

1947 年

3 月 24 日 共産党が紅軍を人民解放軍と改称

6 月 国民党が共産党の本拠地延安攻略に成功

1948 年 人民解放軍の反転攻勢が進む

9 月～11 月 遼瀋戦役

11 月～49 年 1 月 淮海戦役・平津戦役

1949 年

1 月 31 日 人民解放軍が北京に入城

4 月 24 日 南京陥落

10 月 1 日 毛沢東が北京で「中華人民共和国」建国を宣言

12 月 7 日 中華民国の中央政府機構が台湾に移転

1947 年には優勢だった国民党が、1948 年の人民解放軍の反転攻勢に遭っ

てしだいに劣勢になっていく。張が人権宣言に関わっていたのはこういう時期だった。

2 世界人権宣言の conscience

前掲のとおり世界人権宣言第1条は人権の由来を説明している。日本語で「良心」と訳される conscience は、現在は中国語訳でも「良心（リャンシン）」と表記される。今でも使う語彙だが、古くは『孟子』に見える由緒あることばだ。これと似た表現として同じく『孟子』に「良知（リャンチ）」がある⁵。そもそも人権宣言の conscience に対応する訳語として張が想定していたのは「良知」のほうだった。というより、彼はこの良知という概念を中国語や漢字に縁がない他国の委員たちに説明するために conscience という用語を使ったのだ。

世界人権宣言は委員のルネ・カサン（René Cassin）⁶が作った草案をもとに、各国代表から国としての意見を聴取したうえで起草委員会が慎重に審議を尽くして成案を得た。その過程で張ははじめ two-man-mindedness という造語を提案したらしい。起草委員会の同僚だったジョン・ハンフリー（John Peters Humphrey）⁷による日記には張彭春がこの追加提案を行った様子が記録されている（Hobbins (1994), p. 55-56）。

これは中国に古くからある考え方だということであり、張自身の英語での説明から推測して仁のことであろうと先行研究で指摘されている。しかし、他の起草委員たちはこの見慣れぬ語を reason と併記するのを拒み、議論の末に決着したのが conscience だった。張が、仁は conscience に基づくものだと発言したからである⁸。

従来の研究では現在の訳語に依拠して、張彭春は良心を指してそう発言したとみなしてきた。これに対して台湾の劉蔚之（2019）⁹は、制定当時の張自身らの中国語訳では良知とされていたことを根拠に、彼は良知のつもりだったと説く。そして「儒家思想の中の「良知」が広く認められた理由は、その普遍的な価値にあると考えられ、儒家思想であるからではな」く、だからこ

その他の「作成者たちの心を動かし、「宣言」の重要な内容となった」のだろうと述べる。

人権の根源に関して、張彭春は「理性」に加えて「仁」の概念を基礎として追加することを提案した。彼はこの概念を two-man-mindedness と訳し、同情 (sympathy) や同胞意識 (consciousness of his fellowmen) と類似した意味を持ち、道徳と共感心の発展の基礎となるものだと主張した。彼は「仁」の概念が「理性」と共に人間性の基本的特質や人権を享受するための基礎を形成すると主張した。レバノンと英国の代表は張の提案に賛同したが、two-man-mindedness の代わりに、より一般的に理解される「良知」(conscience) という用語を提案した。このテキストの初期草案の作成者であるカサンも賛同し、結果として「良知」が共通の認識となった。¹⁰

劉は、儒家思想の中の「良知」が他の委員たちの賛同を得たのは、この概念が持つ普遍的な価値によるのであり、それが中国という特定の国の文化である儒家思想だからではないとする。わざわざそんな風に言うのは、中国における諸研究が儒家思想の勝利としてこの件を語っているからだだった。

このことについて、別の委員会での張の発言を見ていこう。

3 経済社会理事会で披露された蘊蓄

孫平華 (2023) は前述の著書とは別に、国連が公開している経済社会理事会会議事録から張彭春の発言を網羅的に抜き出し、その原文 (英語) と中国語訳を並記して編纂したものである。その中で中国の伝統思想に触れている箇所を列記する。¹¹ なお、同書の「前言」4 ページには書名になっている「合作共贏 (協力して共に勝者になる)」という語への言及がある。「張彭春は経済と社会の発展の面において世界各国の協力と互惠を強調し、「合作共贏」という重要な中国の価値観を体現した」という。ちなみに「合作共贏」とは習

近平政権が推進している一帯一路政策のキーワードの1つであり、張の国連での発言を集めた資料集の書名がこの語を使っているのは、出版を可能にするための方便という側面であろうが、「儒家思想のすばらしさを世界中に知らしめた功労者」として張を称揚する政治的意図を物語っているといえよう。

① 理事会 1 期 1 回 (1946 年 1 月 23 日)¹²

『孟子』離婁章句下の引用「善をもって人を服する者は、いまだ能く人を服する者あらざるなり。善をもって人を養う、然る後に能く天下を服す。天下心服せずして王となる者、いまだこれあらざるなり（大意：力で服従させるよりはましたが、善行によって人を服従させるのではまだ人を心服させることができていない。善行によって人を養うことではじめて天下を心服させることができる。天下が心服せずに王者となった者は、いまだかつていない）。これを引用した張の主張は、「これこそ当委員会の役割であり、全世界がこのようになることを待ち望んでいる」というもの。

孫は、張がこうして儒家思想の優秀さを他国の委員たちに知らしめたのだと解する。しかし国連の幹部が演説の中で古典の文言を引用しながら自説を述べるのはよくあることで、ここも委員会の役割について（他の委員たちならギリシャの古典かキリスト教の聖書でも引用するところを）自分の国の思想家の文言で飾っただけのことだろう。

② 理事会 2 期 6 回 (1946 年 5 月 31 日)¹³

張は、この委員会設立の動機は人間の自由や尊厳に対する敬意にあることを確認したうえで、「人」の概念に言及し、「人」は相互の尊重によってはじめて自身の尊重を獲得できるのだということ、それについて中国のことばとして two-man-mindedness という相互性を言い表す概念があると紹介する。human individual（個人）を尊重する西洋近代の人間観に付け加えるべき視点として mutual consideration（互いの思いやり）を力説する文脈の中で、張が“two-man-mindedness”という彼の造語を公的な会議でおそらく最初に披露し

た発言と思われる。張の頭に浮かんでいたのは、人を表すニンベン（仁）が2つ（二）あるという意味の字形、すなわち「仁」なのであった。

「仁」の英訳語としてはすでに *benevolence* が定着していたし、現在も通常はこれが使われつづけている。しかし筆者の乏しい英語理解力からしても、*benevolence* は優位者が与える恩恵、仏教用語の「慈悲」（英訳は *mercy*）に近い語感があり、ここで張が言いたかった相互対等性には適切ではない。¹⁴ただ、この時の一回かぎりの演説でならともかく、世界人権宣言という永久に残る重要文書に *two-man-mindedness* が賛同を得るはずもなかった。

③ 理事会 2 期 7 回（1946 年 6 月 4 日）¹⁵

「現在でも人類共通の夢を表現している、2500 年前の孔子に帰属されている一節」ともったいぶった前置きをして、張は「Ta Tao すなわち〈大きな道〉がおこなわれていた時代」についての孔子の解説を紹介している。Ta Tao は漢字表記で「大道」。これは『礼記』という経書の「礼運」と呼ばれる篇にある、孔子が文明が始まるより前の太古の純朴な社会を賛美している箇所である。そこで使われている語によって大同思想と呼ばれていた。『論語』や『孟子』に比べると現代日本ではなじみが薄く、張の古典の素養の深さを示すように見えるかもしれない。しかし孔子のこの発言は 20 世紀初頭には孫文らが愛用することで広まり、『礼記』を読んでいなくても知識人なら誰でも知っている常識に属するものだった。孫文ら革命派・共和主義者の論拠なのであって、この発言ゆえに彼が儒家思想の優越性を説いたとは言えない。しかも、礼運篇の趣意は「そうした昔はあったけれど、それはそれとして」と、孔子がこのあとの文明時代の礼樂の重要性を説くほうにあった。孫文や張の引用のしかたはいわば断章取義なのである。

④ 理事会 4 期 59 回（1947 年 3 月 7 日）¹⁶

この時も同じく礼運篇から大同思想を引用紹介している。

⑤ 理事会 4 期 78 回 (1947 年 3 月 24 日)¹⁷

張は「今から 150 年前まで、中国で出版された本の数は他のあらゆる言語によるものの総数を上回っていた」という自慢話から始めて、その中の古典である『孟子』について「彼の別のことばを数日前に紹介したが¹⁸」と言ってから、その金言として「政府において国民が最も重要であり、土地や君主は二の次である」、および「すべての歴史記録を信じるくらいなら、記録が無いほうがよい」を紹介している。これらはどちらも『孟子』尽心章句下の「民を貴しとなす、社稷これに次ぐ、君を軽しとなす」と「ことごとく書を信ぜば、則ち書無きにしかず」である。いずれも『孟子』の中では（特に朱子学において）人口に膾炙してきた文言であり、日本でも高等学校の漢文の教科書に載っていたりするくらいだから、張の世代の知識人にとっては幼少時に暗唱させられた文章だったろう。これらを引いたからとて古典に造詣が深いとは言えない。²⁰

張は、引用した『孟子』の「民を重しと為す」「書無きにしかず」を紹介する段落に続けて、玄奘のインド行、近代ヨーロッパへの中国思想の刺戟についても語っている。これらの事柄は当時国際的にはほとんど知られていなかったかもしれないが、中国の知識人にとってはやはり常識に属していた。

孫平華が国連の記録文書から張彭春の発言を掬い上げて紹介し中国語訳を付けた作業は研究史的におおいに価値があり、謝意を表したい。しかしながら、孫の当初の意図に反して、これらの発言は決して彼が儒家思想を鼓吹したことを意味するものではない。むしろ近代民主主義の理念に適うもの、「誰もが尊厳をもって扱われる」（大同思想）や「為政者は国民を最重要視せよ」（民を貴しとなす）を選択して紹介しているのは、「儒家思想のすばらしさを欧米人向けに説いた」というよりも、中国国内の内戦（張の公的立場からは「コμμニスト勢力による反乱」）という情勢下において、中国の伝統文化には自由主義諸国が構成する国際社会でも通用する普遍的価値が存在する（から、中華民国こそが正統な政府だ）と、欧米諸国家の代表に向けて力説する必要があったからだと推察される。

おわりに

ではなぜ張は conscience という語を選択したのだろうか。

そもそも中国思想史において「良知」という熟語が万人の具える生得的な判断能力として脚光を浴びるようになったのは、16世紀の思想家王守仁（陽明）が「致良知」を提唱してからだった。誰もが自分の持っている良知を十全に発揮することが社会の安寧をもたらす鍵であるという考え方だった。それは『孟子』の文言に基づいてはいるものの、これを独自に発展させた新しい概念だといえる。²¹

『孟子』における「良知」の一般的な英訳は当時も今も intuitive knowledge だった。²² 後のことになるが、中華民国憲法の起草者張君勱が英語で出版した王守仁の評伝でも intuitive knowledge を使い、致良知の解説まで一貫している。²³ だが intuitive knowledge は直訳すれば「直感的知識」だろう。『孟子』本来の意味の解釈はさておき、王守仁の致良知における良知も人権宣言のいう conscience もこの意味での良知ではない。

張にはこれより前、1930年代にアメリカとイギリスで刊行した、中国についての2冊の概説書がある。²⁴ これらを見るかぎり、彼は王守仁や陽明学に特別な興味関心を示していない。『孟子』について紹介した箇所でも良知には触れていない。どうやらこの語を世界人権宣言に盛り込むことにしたのは、彼の内発的な動機によるものではなさそうである。

ところが当時の中華民国において陽明学は特殊な位置を占め、その中核には良知が置かれていた。蒋介石の思想である。台湾の中正文教基金会が作ったデータベースで検索させてもらうと、良知は約200回登場する。²⁵ 国史館のデータベースのほうは1948年以降の元旦・国慶節・就任時の演説、併せて60編だけなので、良知は5回しか出てこない。²⁶ 良心の用例もこれとほぼ同数あるが、こちらは日常語彙としての一般的な使い方であるのに対して、良知のほうは一定の傾向性を帯びている。1967年1月23日、自由の日に寄せた挨拶「「自由の日」第13回記念大会を祝う文書による挨拶」では「理性と良知」というように並称しており、人権宣言を意識した文言とも思える

ものであって、蒋介石は人権宣言の conscience を良知と解釈していた可能性が窺える。1970 年の「復国・建国の大業の責任を遂げよう」という文章では、当時国際的に中華人民共和国と外交関係を結び、国連代表権をそちらに与えるべきだとする風潮が強まる中、もし事態がそのようになったら、それは「良知理性の滅裂」つまり人権宣言の精神の破綻であり、その場合には即刻国連を脱退するという意思表示をしている（実際に翌年に事態はそのようになってしまった）。蒋介石が conscience を「良知」として理解していたことを如実に示している。世界人権宣言第 1 条に conscience を盛り込むことは、張の発案ではなく蒋介石からの指示だった可能性がある。

張が人権宣言制定の過程でそのつど本国政府に打電して状況を報告していたことは孫平華（2017）などに記されているが、その詳細について筆者は未調査である。蒋介石ら政府首脳の意向が張の国連での言動にどの程度反映していたのかなど、より詳細な実事探究は今後の課題としたい。

■註

- 1 賛成 48 か国、反対 0、棄権 8（ソビエト連邦、ウクライナ、白ロシアなど）、欠席 2 だった。日本は未加盟だったから当然この議決に加わっていない。
- 2 本稿の内容は 2024 年 10 月 12 日に二松学舎大学九段キャンパスで開催された日本中国学会第 76 回大会歴史部会における口頭発表をもとにしている。またこの研究は JSPS 科研学術変革領域「尊厳学の確立」の A03 班（23H04851）の経費により遂行された。
- 3 参考文献一覧にはそれらを代表して劉（2022）を挙げた。この論集には南開大学人権研究中心も主編団体の 1 つとして関与している。同書の張元龍（張彭春の兄伯苓の後裔で執筆当時は第十二期全国政治協商会議常務委員）による「序二」は、冒頭段落で「習近平総書記が中共中央政治局で中国の人権発展の道について集団学習を進めた際に」云々と言い、末尾段落では「習近平総書記は『人権の知恵と人権の研究の基地建设とを強化し、きちんとした理論を育てることに力を尽くし、国際的なルールをよく覚え、中国の人権についての過去を語ることのできる優れた人権専門家を養成せよ』と指示なさった」云々とある。これ以上なにかを言わんやである。

- 4 『孟子』告子章句上に「それその良心を放つゆえんは、亦なお斧斤の木におけるがごとし。旦旦にしてこれを伐れば、以て美となすべけんや（大意：人が本来具えている良心を無くしてしまうわけは、斧で木を伐るようなものだ。毎日木を伐りつづけていくと禿山となり、もはや当初の美しさとは異なってしまう）」とある。
- 5 『孟子』尽心章句上に「人の学ばずして能くするところは、その良能なり。^{おもんばか}慮らずして知るところは、その良知なり（大意：人が学ばずにできるのは良能のはたらき、考えずにわかるのは良知のはたらきだ）」とある。
- 6 フランスの法学者、ソルボンヌ大学教授。国際連盟（League of Nations）で長くフランス代表を務めていた。世界人権宣言を起草した功績により 1968 年にノーベル平和賞を受賞。
- 7 カナダの法学者。張とたびたび食事をともにするなど親密な仲で、その日記には世界人権宣言起草の過程での張の活躍が描かれている。
- 8 孫（2017）：241-247 など。
- 9 この論文は筆者が劉氏の許可を得て近刊の論文集中に日本語訳を掲載させてもらった。小島毅・加藤泰史共編『尊厳概念の転移』（法政大学出版会、2024 年）の劉蔚之「教育学者張彭春の思想過程とその「世界人権宣言」に対する影響（一九二三～一九四八）」、翻訳は台湾出身で東京大学博士課程の胡華喩。
- 10 上記胡の訳文を使用した。
- 11 この抽出作業も胡に担当してもらった。「合作共赢」が習近平の主張であるという指摘も彼女による。
- 12 孫（2023）：6-7
- 13 孫（2023）：46
- 14 では benevolence が誤訳かという、そうも言えない。『論語』における孔子の原意は「君子」という優位者の心情・行動を指すからで、『孟子』でもほぼ同様である。「仁」が対等な個人同士の関係性と思念されるのは 11 世紀の宋学誕生を契機にするというのが筆者の見解だが、張が 20 世紀初頭に天津の学校で刷り込まれた中国古典の基礎知識はこの宋学（朱子学）の見解に基づくものだった。語彙の思想的な変化が背景に存在し、それゆえ彼はあえて two-man-mindedness という造語に奔ったのだらうというのが筆者の見立てである。
- 15 孫（2023）：56-57
- 16 孫（2023）：142-143

- 17 孫 (2023) : 185-186
- 18 張は 12 期 456 回の理事会 (1951 年 3 月 6 日) でも、18 世紀末まで中国は世界の過半の印刷物を作成しており、それで 18 世紀の啓蒙思想家たちや 20 世紀のトルストイが中国文明に敬意を払ったと述べる。こちらの発言がなされた頃には中華民国政府はすでに台湾に移っていたし、前年に始まった朝鮮戦争で国連が派遣した「朝鮮国際連合軍」は毛沢東が送り込んだ「人民義勇軍」と交戦している最中でもあった。張は職務上、「中華民国」が中国文明の正統な後継者だと主張する必要があった。
- 19 張が数日前 (a few days ago) に『孟子』の別のことばを引用したと言っているのは、孫の脚注 (p. 186 n. 1) によれば 2 期 6 回の会議で同じ文言を引用紹介していること。孫が注の後半で「こちらの会議記録に問題があると思われる」と書いているのは、張が other saying と言ったことを指すのだろうと推察するが、張の言い間違いか勘違い、あるいは記録者の聞き間違いか誤解であろうか。
- 20 ここで「書無きにしかず (不如無書)」の朱熹『孟子集注』の解釈は程子の説、「事件を記録する用語は、場合によっては過剰に書くことも許される。学習者はその意義をわきまえればそれでよい。もし用語に固執して意義の理解を損なうようであれば、いっそ書物など無いほうがよいのだ」というのが孟子の意図だと述べている。つまり、もし張が、朱熹のこの注釈を引いて歴史記録のありかたを指すもの (たとえば戦争の悲惨さは誇大に表現する場合があります。そうした犠牲者の数値を真に受けるくらいなら、そんな記録は無いほうがましだ、ということ) だときちんと理解して引用紹介していたならば、孫平華らの主張どおり「張彭春は儒家思想に詳しかった」と言えるだろう。
- 21 中国思想の重要概念であるからこれについての研究は多いが、王守仁の思想における他の重要概念と並べて解説した論文として、山井 (1970) を挙げておく。
- 22 James Legge による『孟子』の 1861 年の訳ですでにこの訳語が使われている。
- 23 Carson Chang (1962) : 78
- 24 Peng-Chun Chang (1934), (1936)
- 25 http://www.ccfid.org.tw/ccf001/index.php?option=com_content&view=category&id=98&Itemid=251
- 26 <https://presidentialdbs.dnrh.gov.tw/index.php?act=ArchivePavp/index> いずれも 2024 年 10 月に検索。

■参考文献

- Peng-Chun Chang (張彭春, 1934), *China: Whence and Whither?*, Institute of Pacific Relations
- Peng-Chun Chang (張彭春, 1936), *China at the Crossroads: The Chinese Situation in Perspective*, Evans Bros
- Carsun Chang (張君勱, 1962), *WANG YANG-MING: Idealist Philosopher of Sixteenth-Century China*, St. John's University Press
- Hobbins, A.J. (1994), *On the Edge of Greatness: The Diaries of John Humphrey, First Director of the United Nations Division of Human Rights*, McGill University Libraries.
- 劉蔚之 (2019) 「教育學者張彭春的思想演進及其對《世界人權宣言》之鍛造」(1923-1948) (『教育研究集刊』第六十五輯第三期)
- 劉景泉 (總主編) (2022) 『中國價值 世界貢獻：張彭春誕辰 130 周年紀念文集』天津社會科學院出版社
- 孫平華 (2017) 『張彭春：世界人權體系的重要設計師』社會科學文獻出版社
- 孫平華 (2023) 『世界合作共贏的中國貢獻：張彭春在聯合國經濟及社會理事會的發言』天津社會科學院
- 山井湧 (1970) 「〈心即理〉〈知行合一〉〈致良知〉の意味：陽明学の一性格」(『日本中國學會報』第 22 集)

(こじま・つよし 東京大学人文社会研究科教授)